663

月刊
言語
2009
6
Vol.38・No.6

2009年6月1日発行（毎月1日発行）第38巻第6号通巻455号　昭和47年8月12日第3種郵便物認可

特集 リズムを科学する

生命活動と相互伝達を支える基盤

ヒトの生命と文化を貫くリズム　三木　博
身体技能の習得に見られるリズム　藤波　努
ロボットとのインタラクションを支えるリズム　小嶋秀樹／マーク・ミハロフスキ
自閉症スペクトラム障害とコミュニケーションリズム　安達　潤／齊藤真善
自己組織化に潜むリズムと同定問題　津田一郎
言語獲得の基盤をなすリズム認知　馬塚れい子
聴覚におけるリズム知覚　中島祥好

◆巻頭エッセイ
岡　真理／橋元淳一郎

◆特別記事
コピュラ文、存在文、所有文
——名詞句解釈の観点から　西山佑司

連載◉インド学へのいざない［3］

ブラーフマナからウパニシャッドへ

後藤敏文（ごとう　としふみ）

1　ヴァーマデーヴァの戦車競争

ヴァーマデーヴァの一五（詩節）からなる、危害を加える諸力を打破するこの（讃歌）が、祭火に焚き木を投ずる際の詩節として用いられる。ヴァーマデーヴァとクスィダーイーとは自身（命）を賭けて戦車競走をしたのだ。クスィダーイーは、追い越して先行する彼の（戦車の）手すりを（車を当てて）押し潰した。彼女は二度目に向きを変えて近づいた、「軛（ながえ）か、車軸でも折ることになろう」と。かのヴァーマデーヴァは火鉢の火を持っていた。彼はその火に目を落とした。彼は「おまえは最前面を左右に展開した突撃のようにせよ」に始まるこの讃歌を見た（観得した）。（すると）彼女に、火は追いかかって、焼き尽くした。彼女は焼かれながらクスィダの池に潜り込んだ。この讃歌が伴唱されるのは危害を加える諸力を害する（滅ぼす）ためにである。（『カタ・サンヒター』I 5.130, 2-7）

これは、最古の散文文献に見られる短い挿話である。祭火を燃え立たせる際に用いる讃歌を指定し、その根拠を述べるが、意味は追いにくい。「ブラーフマナ」と総称される神学文献は難解とされ、異常な精神の産物と紹介される

ことさえしばしばであった（Gonda, *Vedic Literature*, 1975, 342参照）。しかし、ここに見られるのは、現実に知られている池の名によって昔の戦車競争の「神話」を正当化し、その神話によって祭式の手続きを「真実」に適ったもの、即ち、実現するものと根拠づける、論証の一種である。

ヴァーマデーヴァは『リグヴェーダ』第四巻を遺した詩人である。戦車競争の最中に火を持っているのは奇異であるが、そこに理解の鍵がある。アーリヤの部族が移動する時には、部族長または祭官の長が戦車に乗り、部族の火を火鉢に容れて護持した。戦車競技は謎懸けや罵倒の応酬、賭博と並んで、争いの決着や手打ちに行われた。つまり、この神話は、部族の移動中にクスィダーイー「クスィダの娘」という女性の率いる先住部族と遭遇し、その「危害」（ラクシャス、仏典の「羅刹」）を破って領土を得たことを物語る。讃歌中の「突撃」は野焼きによる領土拡大を示唆する。祭式の中でその神話が再現されるのである。

古インドアーリヤ語では、母音ウの後でスsはシュṣ［ʃ］に変化するので、クスィダ *Kusida* はアーリヤ語ではない。別伝承にクスィタとある揺れもこれを裏付ける。女性の部族長や祭官もアーリヤには考え難い。既に『リグヴェーダ』に、ヴァーマデーヴァがヴィパーシ（今のBeas）河畔で、「天の娘」を名乗る女の荷車を打ち壊すことが語られ（IV 30, 8-11）、アーリヤの父権社会が、母系を残す先住部族を圧倒しながら広がった歴史を示唆している。

2　ブラーフマナとシュラウタ祭式

アーリヤ諸部族は、目的に応じ慣習・伝統に従って多様であった祭式・儀礼と、それらを職業的に担っていた祭官家系群とを、拡大の過程で次第に組織化していった。組織化はシュラウタ祭式と呼ばれるものを軸に進められ、祭式用の詩句もこの枠組みに編入された。シュラウタは「学習（伝承）に由来する」を意味し、シュラウタ祭式は宇宙・世界や共同体、首長（王）に関わる大規模祭式である。

祭式は個人の信仰の問題ではなく、宇宙の理法（リタ）を知っていること（「ヴェーダ」）に基づいて、実現力を持つことば（ブラフマン）により自然界、人間界を操作する体系であり、真実にかない、実現するもの（サッティヤ）とされた。ただし、祭式のメカニズムと祭官への「信」（シュラッダー）は祭主に必須とされ、次第に意味を増す。こ

の語はラテン語のクレードーとほぼ同語源で「信を定め置くこと」を意味した。意思の力はクラトゥと呼ばれ、『リグヴェーダ』以来、特に祭官たちにとって重要で、心臓にあるとされた。確信する者がもつ一種の念力である。

献供を担当する祭官（アドヴァリュ）が唱える、行作や事物に意義や効力を賦与する短い文句（ヤジュス）は『ヤジュルヴェーダ』に編集された。この文献には「ブラーフマナ」とよばれる散文文献が併せて編集されており、引き続き成立した『シャタパタ・ブラーフマナ』など、ブラーフマナを題名にもつ文献群と共に、シュラウタ祭式をめぐる議論・根拠付けを内容とする。前八〇〇年前後にまで遡るこれらの文献は、ギリシャにホメーロスの英雄叙事詩が現れるよりも早く、特殊な記録類を除けば、純度の高いインドヨーロッパ語で書かれた散文最古の例として、言語研究の上でも、内容の面でも、重要な資料である。

祭官階級はこの時代までに地位を確立していた。『リグヴェーダ』の段階では、神々やその行為が力をもち、神々に語りかけ取引する能力が祭官に求められたが、今や祭官の遂行する祭式そのものが世界を維持し動かす位置にあり、神々はいわば祭式の構成要素に後退している。

3　ブラーフマナの論理

「ブラーフマナ」は、祭式を構成する詩句（マントラ「真言」）を吟味し、手続きの正しい遂行を検証・確認することを内容としている。「論証」には神話的因縁譚（宇宙開闢と神プラジャーパティ「子孫の主」の話、神々がアスラたちに勝利した次第、事物の由来など）が引かれ、日常目にする諸現象がそうあり、そう呼ばれる理由がこれに結合される。宇宙や諸事が正しく維持されるのは祭官の正しい働きによると明言されることもある。選択肢を挙げて根拠を論ずることも多く、古今の学匠の説や討論対決、他学派の説の論駁などが見られる。ここに、インドの思惟の最初の具体的表現が、まとまった形で存在する。

「論理」の特色として、二つの事物事象の間に存在する共通点を抽象し、それを媒介項として両者を結びつけるバンドゥ「結びつき」、ニダーナ「結びつけ」（仏典の「縁」）などとよばれる結合同置の原理が挙げられる。それに基づいて祭式中の事物行作が現象界の事物現象と同置され、祭官は祭式という操作盤を通じて世界万象を操る。この媒介項の発見をめぐる営為は、宇宙原理の探究へと向けられ、「ウパニシャッド」へと展開した。また、行作や詩句の意

味や根拠を「知って」行うことが祭式に不可欠の要件とされた。ブラーフマナ文献のこの性格は、「…と知っている者は…を得る」という帰結文の頻度の高まりとともに、ウパニシャッドへの入り口となっている。

4 「祭式と布施の効力」

祭式の重点は宇宙・世界の維持から、次第に祭主個人の関心、とりわけ死後の世界の確保に移って行く。舞台は高原にあるヤマの楽園から天界に移され、死者が天界に生まれ変わるとする観念が顕在化し整備された。祭主は天上での生活に備えて、思考能力、感覚器官などの身体諸部位や、労働力、家畜などの資糧を、生前、祭式によって地上から送り届けておく。元来、一族の祖霊全員がその配分に与るとされたが、祭主たる部族長の権力と富の拡大、個人意識の高まりとともに、自らの「貯金」を死後自分だけで使えるよう保証する祭式理論が確立されてゆく。「祭式と布施の効力」（イシュター・プールタ *iṣṭā-pūrtā-*）がそれで、古ウパニシャッドにおいて「業」（カルマン *karmaṇ-*）の理論へと展開する（阪本純子の諸論文参照）。

5 ウパニシャッド

ヴェーダ語で著された本来のウパニシャッドには、『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』、『チャーンドーギャ・ウパニシャッド』、『ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド』がある。前六世紀頃を中心に編集されたと思われる。ヴェーダ学派所属の比較的古いウパニシャッドが他に十数篇あるが、この三文献の延長上に編まれ、既に教科書的色彩を帯びたものとなっている。ウパニシャッドとよばれる文献自体はその後も作られ続けた。

ウパニシャッドでは、祭式をめぐる主題を超えて、広義の哲学的議論が前面に打ち出される。議論の中心は現象界の背後にある原理の探究で、宇宙の最高原理は「ブラフマン」の名に集約されてゆき、「ブラフマンは…である」という断言命題（アーデーシャ）の形で諸説が提示された。個人の次元では、諸々の原理探究の試みが「アートマン（自己）」に集束してゆく。「ウパニシャッド」の原義については諸説があるが、語形自体が直接指示する意味「ものの背後、根底に存するもの・こと」こそが基本性格に合致し、ブラーフマナ文献の思考の延長上によく収まる。

哲学議論が前面に出る背景には社会の変化が考えられ

る。アーリヤ諸部族はこの間さらに東漸を進め、定住生活を達成し、ガンジス上中流域を中心に都市国家を形成しつつあった。バラモン（婆羅門、ブラーフマナ）階級が護持する従来の文化は小規模な部族社会を前提とし、この性格は時代の下がるダルマ・スートラ（「法経」）、さらに後代のダルマ・シャーストラ（「法典」）などの理念世界にも当てはまる。ウパニシャッド成立前後とこれに続く時代は、村落共同体を超えた思想潮流が各方面に出現した特別な時代であり、仏教、ジャイナ教の開祖をはじめ、既成の枠組みを超えた思想家、学者が活躍した。都市を中心とする国家の成立に、有力な学者グループが知識人として求められたらしい。古いウパニシャッドに語られる神学的討論も、こうした時代背景をもとに脚色されたものであろう。

バラモンや王族出身の学匠が各種の教説を説き、あるいは、諸説が彼らに仮託される。ウッダーラカ・アールニは、あらゆる事物を光熱、水、食物の三要素の変容と見なし、究極の原理「有（サット）」が展開させたものとする物質的原子論を説いた。アートマンの探究を徹底させたヤージュニャヴァルキャは、述語されえぬ（「ではない、ではないとのみ言い表される」）アートマンをブラフマンと同置するに至る。この同置については、ブラーフマナの祭式解釈を換骨奪胎して改作した、シャーンディリャの教義も重要である。

6　死にゆくとき

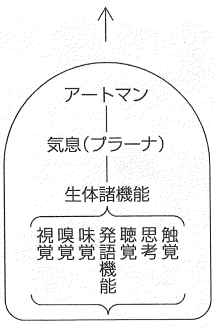
その後の「業と輪廻」理論の、いわば公理となったヤージュニャヴァルキャの教説を一部紹介したい。彼は死にゆく時を次のように語る（ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド IV 4）。

そこでこのアートマンが無力に陥る、まさしく意識混濁に陥る場合、すると、これら生体諸機能が当の者（アートマン）へ向かって集まって来る。それは、これら光熱の諸要素（諸機能の構成要素）を取り収めながら、ほかならぬ心臓へと降りて行く。そこでこの視覚を司る機能（プルシャ「人」）があちら側へと向きを変えて戻ると、すると、ひとは形を認識しない者となる。（それはアートマンに）合一する。（すると）「彼はものが見えない」と人々は言う。（以下、嗅覚、味覚、発語機能、聴覚、思考、触覚がアートマンへ合

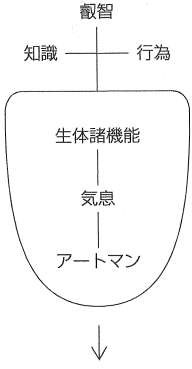
一回収され、識別能力が失われることを述べる。）するとこの人の心臓の先端が閃く。その閃きを通って、アートマンは出て行く。…それが出て行くと、気息がついて出て行く。気息がついて出て行く時、全ての生体諸機能がついて出て行く。（アートマンはその結果）認識機能を備えた者となる。（アートマンは）認識機能を備えた者へと降りて行く。それに知識と行為とが後ろから一緒につかまっている、以前の叡智も。

主語や場面の転換が明示されないため理解が難しいが、「認識機能を備えた者へと降りて行く」は、アートマン（または明示されない輪廻主体）が地上へ降下再生することを意味している。つまり輪廻の過程を述べているのである（「輪廻」の語自体はまだ現れない）。

死に際して，出て行くときの輪廻主体



天界から地上へ下降再生するときの輪廻主体



輪廻主体は、アートマン―気息（プラーナ）―諸機能（仏典の眼耳鼻舌身意に当たる）から成る。死後、それが天界に上ると、天界に蓄えられていた知識（ヴィディヤー「知識技能」）と行為（カルマン、「業」）、さらに前生までに獲得した叡智（プラジュニャー）と再結合し、神、ガンダルヴァ等の姿を取って長い寿命を享受する。天界で「再死」し、地上に下降する時には、それら三要素がよい母胎へと導く。仮に「叡智」としたプラジュニャー（「般若」、洞察力）は行く先が解る能力を謂うことが多く、仏教で、輪廻を超越するための最重要概念となる所以である。

後続する部分では、三要素はさらに「業」へと絞り込まれる。「アートマンは、どういう行為（業）を為すかに従って、（来世で）それに応じた状態になる。」「業」はブラーフマナ文献で確立した「祭式と布施の効力」の世俗化で、当時の思弁が到達した最先端の理論である。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）